

オンラインでも楽しい学びを～動物園・水族園のオンラインプログラムの可能性

1. コロナ禍での教育普及活動

都立動物園・水族園においては令和2年度と3年度の2年間、コロナ禍で臨時休園を繰り返し、休園期間は通算9ヶ月以上にも及んだ。また開園しても感染拡大防止のため、従来行ってきた展示前ガイドやふれあい活動、体験型プログラム、野外観察会などの対面での教育普及活動を休止せざるを得ない状況となった。そこで最初に取り組んだのが、ツイッターやInstagramなどを使った情報発信である。外出できずにおうち時間を過ごす方々に、飼育動物の近況を魅力的な写真や動画を使って頻繁に発信した。また、新たなWEBコンテンツ「東京 Zoovie Maps & Tours」では動物園・水族園をオンラインでめぐることができるバーチャルツアーページの公開も行った。



写真-1 様々なオンラインプログラム

その他にも試行錯誤しながらWEB会議システムやYouTubeを使ったオンラインプログラムを積極的に展開した。それらは、対象とする人数や双方向性の程度によって、①少人数を対象にした体験型・ワークショップ型プログラム、②参加者限定の双方向性を高めた講義型プログラム、③大人数を対象に双方向性も保持したライブ配信、④大人数を対象にした動画配信、の主に4つに分類できる(写真-1)

いずれも初めての取り組みで、失敗もしながら徐々に必要な機材をそろえたり、技術を習得したりしていった。とりわけ大きな課題だったのは、従来の教育普及活動のなかで重視してきた、実物(展示動物)を介した体験的な学び・人を介した双方向性の高い学びをオンラインでどう実践できるかであった。

実践例として葛西臨海水族園で実施したふたつの教育プログラムについて紹介する。

2 小学生向けの体験型プログラム実践例

ひとつは小学生3・4年向けのシリーズプログラム「海の遊びや」である。このプログラムは2014年より毎年実施しており、「視点をもって生き物を詳細に観察すること」や「職員と参加者との対話をとおして学ぶこと」、そしてなにより「子どもたちが直に生き物や自然と接すること」を重視してきた。

このプログラムをオンラインで行う際に、もっとも工夫したのは実物にふれる機会の提供である。

例えば「くらべてみるとおもしろい〜クロマグロとくらべてみよう」というテーマの回では、参加者に事前に好きな鮮魚を1尾丸ごと用意してもらい、当日はいわゆる「マイフィッシュ」を水族園側のクロマグロと比べながら

観察してもらった(写真-2)。また観察の擬似体験として体のつくりや行動がモニターで観察できる標本や動画を豊富に用意する、双方向性を高めるためにグループ分けの機能を使い、少人数を対象にきめ細やかな対応をするなどの工夫をした。

実際にやってみると、通信環境のトラブルやモニター越しでの対応の難しさなどはあったが、オンラインでも詳細な観察や対話をとおした学びに思った以上の手応えを感じることができた。また、海外をはじめ遠方からの参加があったり、家という環境で参加者がリラックスして学べたりというオンラインならではの良さも見える結果となった。



写真-2 少人数のグループワークで魚を観察

3 YouTube での生配信実践例

もうひとつの実践例は開園記念日に行った24時間の生配信、「マグロ密着24時!!」である。2021年10月に実施したこのプログラムは、それまでの取り組みの集大成と言えるものとなった。クロマグロをテーマに、マグロ水槽からの生配信の合間に、スケッチやクイズ企画、専門的な内容の講演会、バックヤード紹介、エサの時間ガイド、夜のラジオ風放送、パロディCMなど、子どもから大人まで、24時間好きな時間に視聴できるバラエティー豊かなプログラムを散りばめた。事前に「マグロエピソード」や「一押し生き物」を募集しプログラム内で紹介する、視聴者からの質問に集中的に答える「まぐろなんでも質問箱」を設けるなど、視聴者の参加意欲を高め、双方向性を保つ工夫もした。結果、幅広い年齢層の視聴があり、チャット欄での活発なやりとりからも、たくさんの方がクロマグロの魅力を楽しみながら学んだことが伺えた。また240通も集まったアンケートからは、「やはり水族園に行って実物を見たい」という来園動機につながったこともわかった。



写真-3 開園記念日に行った24時間の生配信

4 今後のオンラインプログラムの可能性

動物園・水族園は動物を飼育展示し、その生きている姿を目の前にして学んでもらう場所である。これからも実物を介した学びが教育普及活動の柱であることは変りない。しかし、オンラインプログラムに取り組むことで、より多くの人とつながることができたり、今までになかった新たな動物園・水族園の利用方法を生み出すことができたりと教育普及活動の可能性が広がったと感じている。オンラインでも参加者の身近な動物や自然を教材とし、実物と接することの楽しさを伝えることができるし、来園への動機づけにつなげることもできる。なにより、障がいがある方や遠隔地にお住まいの方など様々な理由で来園や参加が難しい人を取り残さないことは、社会教育施設としての使命でもある。

今後は従来の教育普及活動にオンラインプログラムも取り入れたハイブリッド型の教育普及活動に取り組み、社会教育施設としての機能をより強化していきたい。